

時差出勤で育児の宮本さん(仮名)



写真はイメージです。

育児休暇も、産後1年以内に、1ヵ月取らなければならぬとすれば普及あるのでは？

宮本さん夫妻は、共働きでしたので子どもが生まれる前から、家事は分担していました。少年の頃から、家の手伝いをしてきたという宮本さんにとって、家事は苦にならないことでした。

出産以後、奥さんは専業主婦に。二人は近くに住む親にはできるだけ頼らず、自分たちで育児や家事全般に勤しんでいます。

仕事の工夫でパパも育児を

子どもが生まれてからは、ご主人は早朝に出勤し、早めに帰宅するようにしました。それでも、帰宅時間は夜の8時頃になります。そして、帰宅後にオムツ替え、お風呂入れ、寝かしつけなどの育児を担います。

人生観が変わった田澤さん



田澤仁志さん

夫の子育ては「手伝い」ではなく、妻と協働の「仕事」だと思えます。

立ち会い出産をしたとき「うああ、先をこされた」という衝撃を感じたということです。妻が出産というすごい仕事をなしたのを目の当たりにして、自分は今からどうやって、これに匹敵するようなことを、取りかえせるかと。

「よく、夫が言う台詞に『こんなに手伝っているのに、何が文句があるんだ』というのがありますが、その感覚は間違っている。夫の子育ては「手伝い」ではなく、妻と協働の「仕事」だと気づいたということです。

育児休暇取得まで

夫妻ともに教職の田澤さんは、妻が産休と育児休暇を合わせて1年取ったあと、次の年、一年間の育児休暇を取りました。妊娠

育児休暇2ヶ月の小笠原さん



小笠原雄二さん

子育てに積極的に参加し、この時期にしかできない、父と子のふれあいを大切にしようと考えました。

第2子誕生に合わせて、2ヵ月の育児休暇を取ったのが、市立学校の用務を勤める小笠原さんです。長女の誕生のときは、育児休暇は取らずに、勤務を続けながら育児をしたのですが「その時に、出産後の育児がどんなに大変なことなのかを、知らされました。それでも最初の子でしたのでその子の世話だけでよかったのですが、次の子では育児の苦労は容易に想像できました。」上の子がまだ幼く、その世話にも手がかけられます。母親ひとりだけではとうてい手に負えないほどの家事負担です。

特に、両親を独占していた中で、新しい子の参入は長子の心中が穏やかではなくなるのは、容易に予測できます。小笠原さんは、育児は新しい子のためだけでなく、上の子のためでもあるのだ